



シンポジウム 社会学 v.s. 建築 v.s. アート いま「空間の自由」を問う - 社会 / 建築 / アートの交点 -

2006年9月2日(土) 14:30~17:30 せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

目次

1. はじめに
2. シンポジウム要旨
 - 1) 「空間管理」のパラドックス
- 「安全」を囲い込めない住空間-
 - 2) 空間の実践
 - 3) 「パラドックス (概念)」から
「トレードオフ (現実)」へ
3. パネリスト略歴
4. 学際研究会*1
5. 関連出版企画

空間の実践

今我々が生きているグローバル化の世界というのは、国境を越えて人が交流するとか、異文化が混じり合うとか、そういう心温まることだけではなく、資本が全世界規模でなりふり構わぬ実践をするという残酷な部分を伴っている。資本の実践は、各地において障害となる古い制度や、物理的な構造を破壊し作り替えていくことによって、間接的なかたちで私たちが生きている空間や社会関係や風景を作り替えている。現に東京では、地価の高い都心の土地を、それがもともと住宅地であろうとなんであろうと、気の抜けた高層ビルとショッピングモールに置き換える大規模再開発があるし、地方都市では田園風景の中に忽然と巨大ショッピングモールあり、ともに資本の実践の一つの典型になっている。その一方では人口減少により維持が困難になった公共施設や、にぎわいを失った旧市街があるが、これは資本の実践にとって魅力がない地域の現象ということもできる。こうした変化は、都市計画の理想主義の延長にあるわけでもないし、生活文化の延長にあるわけでもないのだから、それを理解することはなかなか容易なことではない。そこに想像力の空白のようなものが生まれている。現在出現しつつある都市風景というのは、この想像力の空白が露になったものと言うこともできる。この空白を現実の設計作業に接続する回路は何だろうか？ どうすればこうした空白を相手に建築の意味を獲得することができるのだろうか？

この空白の領域を捉えようとするとき、アンリ・ルフェーブル言うところの「空間の実践」は、一つの視座を与えてくれる。ルフェーブルの「空間の実践」というのは身体を介した原始的なものから、政治的なものまで様々な次元があるので、一筋縄にはいかない複雑でわかりにくい概念なのだが、ここではひとまず「ある空間が社会に出現し、維持されていくこと、あるいはそのやり方」としておく。つまり空間に主体をおくような見方なのである。従って、先ほどの空白の都市風景も、それはそれである種の空間実践の結果であるということが出来る。建築空間論はまず建築ありきなわけだから、建築がどのように出現し、維持されるものであるのかについては言葉を持たない。しかし、そういった空間を誰が何のために必要とし、どのように管理され、利用されていくのかということが、建築の作り方を規定し、空間の質に著しい影響を与えてしまうことは明らかであろう。建築を設計するという事は「空間の実践」の一部でしかない。しかし、空間の実践の物語を増幅させることはできる。そういった相対化された視点で、実践の面倒な諸相から学びつつ、時には批評しながら、建築の意味を発生させるコンテキストを見いだしていくことが、結局は建築の地平を新しく作り替えていくことになるのではないだろうか。

塚本由晴 (つかもとよしはる)

主催

関西学院大学 21世紀 COE プログラム
せんだいメディアテーク

